

**PERROTIN**

---

**Izumi KATO**

*Numéro Tokyo,*

男の利き手—加藤泉

%041 %2023

hand man

## 男の利き手

# 128

たくさんの物事を生み出し、行ってきた“男の利き手”。

個性豊かな表情とそこに刻まれたエピソードを通じて、

これまで歩んできた歴史の一幕を振り返る。

美術家、加藤泉の“利き手”が語る人生の名場面。

Photo : Kazumi Kurigami Interview & Text : Hiroyasu Yamauchi

Vol.164 Izumi Kato

プラモづくりの熱気は  
創作のそれそのもの

ど、ガンダムはアニメで出てくると  
おりのフォルムと細部を持っていて、  
革命的でした。皆と同じようにはマ  
キヤンバスや立体の表面に描いてい  
るのが、加藤泉さんの制作手法です。

——今回的新シリーズでも「自作と  
プラモデルを融合させたい！」とい  
う衝動があつたわけですね？

そもそもすべてを自分がつくっている  
とは思っていませんからね。絵の具  
にしたってキャンバスにしても、考  
えてみれば既製のものを使っている  
わけでしょう？　むしろ人に任せら  
れるところは大いに任せて、どうし  
ても僕がやらなくちゃいけないとこ

——絵筆を使わず手指を用いて直接  
キャラバスや立体の表面に描いてい  
る手が、加藤泉さんの制作手法です。  
日々酷使しているであろう手なら、  
さぞ荒々しくて傷もたくさんあるの  
か……と思えまさにあらず。とても  
美しい手を保つていらっしゃるので  
すね。

——アーティストに専心する前の若い頃  
は肉体労働もしてたのに、シンとか  
マメもできなくて、けつこう繊細な  
ままでしよう？　特に手入れもしてい  
ないんですけどね。まあ僕にとって  
手は絵を描く道具だから、きれいか  
どうかよりも、道具として優秀かど  
うかが重要。その点、僕の手はなか  
なか器用で使い勝手がいいと思いま  
すよ。あ、でも時と場合によるかな。  
絵を描くときはよく動いてくれるけ  
ど、食事のとき箸を持つたりするの  
はまだに苦手だったりするので。

——ワタリウム美術館で開催中の展  
覧会「加藤泉——寄生するプラモデ  
ル」では、新作の「プラモデルシリ  
ーズ」がたっぷり観られます。既製  
品のヴィンテージプラモデルと自身  
の木彫り・ソフトビニール作品を融  
合させたり、ジオラマを築いたり、  
プラモの箱までつくつたりと、自由  
自在な展開でとっても楽しそう。小  
さい頃から繊細かつ器用なその手で、  
プラモモデルづくりにも打ち込んで  
たのでしょうか。

——僕の世代だと小学生時代にちょ  
うど「機動戦士ガンダム」のいわゆ  
る「ガンプラ」が出てきたんですよ。  
それまでのプラモデルはブリキ  
人形みたいでリアルじゃなかっただけ  
で、ガンドムはアニメで出てくると  
ころにはいつたんプラモづくりから  
離れてしまい、大人になってから  
日々酷使していられるであろう手なら、  
さぞ荒々しくて傷もたくさんあるの  
か……と思えまさにあらず。とても  
美しい手を保つていらっしゃるので  
すね。

——会場に身を置いていると、プラ  
モデルづくりに夢中になっていた子  
ども時代の「熱」が、ふつふつと蘇  
る気がしました。

——そう、ガングラブづくりしているとき  
って、異様なほど集中しましたよね。  
あの熱気というか強い衝動は、創作  
のときに感じるものとなり近いで  
すし、かなり大事なものだと思う。  
アーティストにとっていちばん肝心  
なのは「やりたいこと」を見失わな  
いことだから。それは難しくいうと  
モチベーションとかコンセプトって  
ことになるんだろうけど、皆いい絵  
を描きたい、ワクワクするものをつ  
くりたい、という気持ちを根っこに  
持つて創作を始めているはずなんで  
すよ。プロになつて技術や振る舞い  
方を身に付けると、そうした初期衝  
動を失くしても仕事としては何とか  
やっていけるかもしれないけど、そ  
れじゃつまらない。「やりたいこと」  
の有無は造形にすぐ反映されて、や  
りたくないものを量産しているとす  
ぐバレるものですね。少なくとも  
僕の場合は、やりたいことへの衝動  
が生命線になつている。それがなく  
なつたら、もう創作のやめ時ですよ。

——「ヒトガタ」をつくることだ

注力していたい

——会場に身を置いていると、プラ  
モデルづくりに夢中になっていた子  
ども時代の「熱」が、ふつふつと蘇  
る気がしました。

——そうすると今回も、プラモデル  
を用いてうまく作品が成り立つかど  
うか、確信のないままに制作が進ん  
でいったのですか。

——言葉で説明できるような理屈や確信  
はまったくないです。ただ、自分  
としては「ピンとくる」ものがある。  
これはいける！　といった手応えは  
持っていますね。あとはその直感を  
信じてチャレンジしていくだけ。そ  
れで自分の作品を更新できたときに  
は、なんともいえず「生きてるな！」  
っていう気分になる。これをいちど  
味わつてしまふと、つくることに病  
みつきになつてしまふんですね。

——「プラモデルシリーズ」では、  
自作に既製品が入り込んでくること  
となります。ご自身の創造に異質な  
ものが混ざるのは、気になつたりは  
しない？

——そこはまったく気になりません。そ

——アートの世界には  
まだまだ面白い道がある

——「プラモデルシリーズ」、またその  
他の作品の今後の展開はどうなつて  
いくのでしょうか。

——あらかじめ決めている道筋はない  
んですよ。いまど地続きでナチュラル  
に展開していくば、何か新しいもの  
がいくらでも出てくるだろうと信じ  
ています。自分の中にタブーはない  
ので、これまで築いたものを平氣で  
壊していくかもしれないですね。「自

もそもすべてを自分がつくっている  
とは思っていませんからね。絵の具  
にしたってキャンバスにしても、考  
えてみれば既製のものを使っている  
わけでしょう？　むしろ人に任せら  
れるところは大いに任せて、どうし  
ても僕がやらなくちゃいけないとこ

りましたね。ただ、中学校に上がる  
ころにはいつたんプラモづくりから  
離れてしまい、大人になってから  
またジワジワと興味が湧いてきたと  
いふたところ。マニアといえるほど  
ものすごく詳しくしたりするわけじ  
ゃないです。

——今回的新シリーズでも「自作と  
プラモデルを融合させたい！」とい  
う衝動があつたわけですね？

——何か難しげなことを考えたわけじ  
ゃなくて、思いついたから「どうかな」  
とやつてみたまでですけどね。結果  
まして面白いことになつたぞと感じ  
てはいますけど。ただ、これがなぜ  
面白いのかは、いまのところ自分で  
もよくわからない。いつもそうなん  
です。いま自分がやつているのがい  
つたい何なのかなって、たいていは不  
明なままで。10年くらいするとお  
ぼろげに言語化できたりしてきます  
が、そのときは作品もすでにひと  
段落している。ということは、自分  
の中で理解も消化もしきれないまま  
で進むことが必要だし、そういう姿  
勢がきっと創作のキモということに  
なつてゐるんでしようね。

——そうすると今回も、動物をモチーフ

にすることはありません。動物はい

るなん人がつくっているし、それぞ

れの動物の特徴を捉えるのは比較的

容易なことかなとも思えます。そこ

にあって僕が参入して、同じことを

やる必要もないだろうと判断してい

ます。それよりも僕は、ヒトガタを

つくり続けることに注力したい。僕

にしかできないことが、そこにはあ

るとして感じているからです。僕のヒト

ガタには、ごく単純な造形のなかに

相当たくさん情報を入れてあります。

同じことをやれる人はまずいな

いだろうし、そこは他の人には任せ

られない領分だと思って取り組んで

いますね。

——アートの世界には  
まだまだ面白い道がある

——「プラモデルシリーズ」、またその  
他の作品の今後の展開はどうなつて  
いくのでしょうか。

——あらかじめ決めている道筋はない  
んですよ。いまど地続きでナチュラル  
に展開していくば、何か新しいもの  
がいくらでも出てくるだろうと信じ  
ています。自分の中にタブーはない  
ので、これまで築いたものを平氣で  
壊していくかもしれないですね。「自

chiro-man-cy



## 利き手：加藤泉の歩み

(かとう・いずみ)

1969年、島根県に生まれる。

1990年代末より画家として本格的にキャリアをスタート。

子どもが描くようなシンプルな記号的な顔のかたちに始まり、現在まで人がたを手がかりに展開。国内外にて個展やグループ展に多数参加。

2007年には第52回ヴェネチア・ビエンナーレ国際美術展に招請され、さらに国際的に活躍。

以降、彫刻の森美術館（神奈川／2010年）、霧島アートの森（鹿児島／2012年）、レッドブリック美術館（北京／2018年）、カーサ・ワビ（メキシコ／2019年）、原美術館（東京）、ハラ ミュージアム アーク（群馬／ともに2019年）、SCAD美術館（アメリカ／2021年）などにて個展を開催。

また主なグループ展に「内臓感覚—遠クテ近イ生ノ声」金沢21世紀美術館（2013年）、「STANCE or DISTANCE? わたしと世界をつなぐ『距離』」熊本市現代美術館（2015年）、「Japanorama. A new vision on art since 1970」ボンビドゥ・センター・メッツ（フランス／2017年）がある。

2022年11月より、個展「加藤泉一寄生するプラモデル」をワタリウム美術館（東京）にて開催中。

2023年6月にはペロタンギャラリー（フランス・パリ）、オニツカタイガーが運営するタイガーギャラリー（イギリス・ロンドン）で個展を開催予定。



加藤泉 photo by Claire Dorn



無題 2022 photo by Kei Okano



「加藤泉一寄生するプラモデル」  
会場：ワタリウム美術館（東京・外苑前）  
会期：3月12日（日）まで  
休館日：月曜  
開館時間：11:00～19:00  
最新情報は公式ウェブサイトをご確認ください  
[www.watarium.co.jp](http://www.watarium.co.jp)



無題 2022 photo by Kei Okano



無題 2020 photo by Kei Okano



オリジナル・プラスチックモデル photo by Kei Okano

操上和美（くりがみ・かずみ）

写真家。1936年、北海道生まれ。広告、エディトリアルなどで第一線で活躍。最近の写真集に『SELF PORTRAIT』『DEDICATED』『April』など。2008年には初監督映画『セラチンシルバー LOVE』が公開された。

50歳を越えてつかんだ  
新しい自由  
「石の作品をプラモデルにす

が組み立てることによって、僕の作品が完成するという不思議なことがそこでは起こります。絵の部分を2種類のデカール（転写シート）にしてあるので、石型を組み立ててから好きなように貼ってもらえばいいのですが、つくった人がたとえどんなに貼るのに失敗しても、それが僕の作品のかたちとなる。なんだか面白いでしょう？ このプラモデルについては、第4弾くらいまでつくる計画がすでにあります。

分にしかできないもの」としてずっとつくってきたヒトガタだつて、もういいやと思つたらスッパリやめてしまうかもしれない。大事にしてきたものを捨て去つてしまふ惜しくないくらい、新しくて面白い探究の道がアートの世界にはゴロゴロ転がついているということです。たまに絵画は終わつたとか「美術は死んだ」といった言い方をする人がいるけれど、僕はまったくそうは思わない。少なくとも僕の創作は、そんな簡単に終わるはずもないです。進む方向は本人にもまったくわかりませんけれどね。

ただし、そういうえば「プラモデルのシリーズ」に関しては、次の展開が少しだけ見えています。今回「オリジナル・プラスチックモデル」と称して、

僕の石の作品を「プラモデル」に仕立てました。箱や組立説明書、オリジナル・ボスターもつくりてトータルパッケージとしたものです。購入した人

が組み立てることによって、僕の作品が完成するという不思議なことが

そこでは起こります。絵の部分を2

種類のデカール（転写シート）にし

てあるので、石型を組み立ててから

好きなように貼つてもらえばいいの

ですが、つくった人がたとえどんなに

貼るのに失敗しても、それが僕の作

品のかたちとなる。なんだか面白い

でしょう？ この「プラモデル」につい

ては、第4弾くらいまでつくる計画

がすでにあります。

がすでにあります。

「誰かが組み立てたものが自分の作品になる」といった言葉を聞くと、ああなんて柔軟な発想なのだろうと感嘆します。そうした自由なアーティストとはいえないのに、何かに縛られず自由にやつてきたつもりですけど、50歳を越えたあたりからは別種の自由を感じるようになりましたね。若い頃ってどうしても意識過剰がちで自分が何かに縛られていると思い込んでいたので、縛を断ち切る行為、例えばそれこそ校舎の窓ガラスを割ることが自由と考えがち。または、無数に並んだ選択肢のなかから、自分の好きなものを選べるのが自由だと感じたりしますよね。年齢を重ねていくと、傍若無人に振る舞いはしづらくなるし、選択肢もどんどん限られていくのを実感するしで、一見、自由が減っていくに思えるけれどどうじやない。代わりに、自分がこれと決めて選んだものを、どこまでも深く掘つていける自由が得られるんですよ。僕は30代の頃に、深掘りするものとしてアートを選び取ったので、そこから探求を進めていくつて、いまではその穴のなかをかなり自由に掘り進められるようになった。僕は平面の絵画表現を主としながら立体作品もつくるし、素材だつて木、革、ソフトビニールといろいろ使いますが、それは自分の掘ってきたアートという領域でなら自在に振る舞えるからですね。作品を見る人にも、いまの僕の自由の感覚が伝わっているようだつたらいいですね。